

格助詞との承接から見る副助詞の性質

—コーパスによる再考—

山 田 昌 裕

The Nature of Adverbial-particles from the Perspective of Connection with Case-particles — Reconsideration by the Corpus —

Yamada Masahiro

要旨

本稿では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」を使って、副助詞「ノミ」「バカリ」「ダケ」「コソ」「スラ」「サエ」「デモ」「ナンカ」「ナンゾ」「ナド」「クライ」と格助詞「ガ」「ヲ」「ニ」との承接の実態を示した上で、その実態から考えられる副助詞の性質について考察した。その結果、副助詞のカテゴリーによって、格助詞との承接のありかたにそれぞれ特徴が見られ、副助詞と格助詞の承接に関する研究においては、副助詞や格助詞を一括りにしての分析はできないという結論に至った。

またその実態をもとに、格助詞との承接形式が副助詞の機能と相関するという理論に関して検証をおこなった。具体的には「クライ」と「ナド」に関して考察し、格助詞との承接のありかたと実例を吟味することにより、副助詞と格助詞との承接と副助詞の機能の相関は見られないという結論に至った。

今後の課題として、古典語における副助詞と格助詞との承接のありかたを調査すること、また格助詞が承接しない「名詞+副助詞」における「副助詞」がどのような振る舞いをするのか、副詞や「ハ」との共起関係についても調査することがあげられる。

キーワード：副助詞と格助詞との承接、副助詞の性質、「クライ」、「ナド」、

BCCWJ

Key words : Connection of Adverbial-particles and Case particles

The Nature of Adverbial-particles, “KURAI”, “NADO”, BCCWJ

1. はじめに

近年、多種多様なコーパスが開発されており、日本語文法研究において欠くことができなくなっている。特に国立国語研究所で公開されている中納言コーパスでは「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」「日本語歴史コーパス (CHJ)」などが公開されており、文法研究の一助となっている。

現代語日本語に関して我々は内省がきくということは確かであるが、場合によっては実態と内省が乖離する場合もある。①～④はBCCWJから拾った例である。

- ① 責める調子ではない。淡々と事実をのみ告げているだけだ。
(星野亮『異界の森の夢追い人』)
- ② いっぽうこのような記録類の常として、必ずしも実際のできごとのみを記しているわけではないこともまた事実である。
(山内譲『瀬戸内の海賊』)
- ③ 自然は問いかける人へのみ答えてくれる (石井実『昆虫ウォッチング』)
- ④ わが国を真に憂える者のみにその資格が与えられる。
(田盛清隆『ヤング武士道』)

内省によれば①～④いずれも日本語表現として誤りはないと判断されるであろう。しかし、BCCWJによれば、「ヲノミ」が18例であるのに対して、「ノミヲ」は1249例となっており、「ノミ」が格助詞「ヲ」と承接する際には「ノミヲ」に偏っていることがわかる。一方で、「ニノミ」は772例、「ノミニ」は642例と、「ノミ」が格助詞「ニ」と承接する場合には偏りが見られない。「ノミ」と「ヲ」との承接、「ノミ」と「ニ」との承接はそれぞれ様相が異なるということになる。このような実情はやはりコーパスでなければ知ることのできないことであろう¹⁾。因みに「ノミ」と「ガ」が承接する際には「ノ

ミガ」となるが、これは内省とコーパスによる実態とが一致する。

本稿では、BCCWJを使って副助詞と格助詞「ガ」「ヲ」「ニ」との承接の実態を示した上で、その実態から考えられる副助詞の性質と、副助詞の機能が格助詞との前後接に関連するという理論について考察したいと思う。以下、2節では、対象となる副助詞の選定をおこない、3節では、それぞれの副助詞と格助詞「ガ」「ヲ」「ニ」との承接の実態を示した上で、そこからうかがわれる副助詞の特徴について指摘する。4節では、先行研究の理論と実態との整合性について検証し、5節では、まとめと今後の課題について述べたい。

2. 本稿で対象とする副助詞

本稿で考える副助詞は、いわゆるとりたて機能を持つ助詞であるが、その他の機能で用いられているものも対象とする。つまり形態を重視する²⁾。

例えば「ばかり」には限定（とりたて）や概数量を示す用法がある。⑤の「一ヶ月ばかり」は概数量を示していると考えられるが、⑥の「三十席ばかり」は概数量ともまた限定（とりたて）とも解釈ができると思われる。

- ⑤ 昭和八年の夏、死があと一ヶ月ばかりに迫つてゐた頃、賢治は、特に印刷所に注文して作った、活版刷赤罫の詩稿用紙を用ひて
(入沢康夫『群像日本の作家』)
- ⑥ 会場のABCホールでは、前から十列目と十一列目の三十席ばかりに白いカバーがかけられ、そこだけが招待客用に用意された席で、ほかはすべて自由席になっている。
(内田康夫『伊香保殺人事件』)

本稿の目的は副助詞と格助詞との承接の実態を明らかにした上で、副助詞の特徴を改めて考察するものである。副助詞それぞれが持つ機能の差異が格助詞との承接とどのように関わっているのかにも興味を引かれるところであるが、⑤のような例を調査対象からはずさず、まずは副助詞と格助詞との承接の全体像を明らかにしたい。

さて、沼田(2008)によれば「も、でも、だって、さえ、すら、まで、だけ、のみ、ばかり、しか、こそ、など、なんか、なんて、なんぞ、くらい」をとりたて詞としてあげている。また、『現代日本語文法5』（くろしお出版）によれば、とりたて助詞の意味を分類し、累加「も」、対比「は」「なら」、

限定「だけ」「しか」「ばかり」「こそ」、極限「さえ」「まで」「も」「でも」、評価「なんか」「なんて」「など」「くらい」、ほかし「も」「でも」「なんか」「など」をあげている (pp. 4～5)。本稿ではこれらの中から、格助詞「ガ」「ヲ」「ニ」と承接するものを調査対象とした。また「マデ」に関しては相当数の格助詞が存在し、副助詞用法だけを抽出することが困難であるため今回は除いた。

上記の手続きによって対象とする副助詞を絞り込むと、「は」「も」「しか」「なら」「なんて」「だって」が除かれることになり、『現代日本語文法5』の意味分類を借りてまとめなおすと、限定「ノミ」「バカリ」「ダケ」「コソ」、極限「スラ」「サエ」「デモ」、評価「ナンカ」「ナンゾ」「ナド」「クライ」、以上11種となる。本稿ではこれらの副助詞が名詞に下接する場合を調査した。

3. 実態

3.1 数値から見る承接関係の実態

ここでは、先にあげた限定4種、極限3種、評価4種、計11種それぞれの副助詞が、「ガ」「ヲ」「ニ」と承接する際に前接するののか後接するののか、その実態を実数で示した上で、その実態からうかがわれる特徴について指摘する³⁾

| | —ガ／ガー | —ヲ／ラー | —ニ／ニー |
|-----|--------|---------|----------|
| ノミ | 816／× | 1249／18 | 642／772 |
| バカリ | 586／× | 551／2 | 352／239 |
| ダケ | 4579／× | 4329／3 | 3407／844 |
| コソ | 1295／× | 21／57 | 2／673 |

| | —ガ／ガー | —ヲ／ラー | —ニ／ニー |
|----|-------|-------|--------|
| スラ | 12／× | 2／18 | ×／215 |
| サエ | 7／× | 3／97 | 1／485 |
| デモ | ×／× | 1／4 | ×／1902 |

| | —ガ／ガー | —ヲ／ラー | —ニ／ニー |
|-----|--------|---------|----------|
| ナド | 9459／2 | 15624／6 | 8079／153 |
| クライ | 197／× | 87／× | 1003／4 |
| ナンゾ | 8／× | 35／× | 35／12 |
| ナンカ | 214／× | 345／× | 671／158 |

上記の表からうかがえる副助詞の特徴を以下にあげる。

- a. 副助詞はそのカテゴリーにかかわらず、すべて「ガ」に前接する⁴⁾。この承接形式には例外がなく、かなり強固な承接形式である。
- b. 限定系の副助詞（ただし「コソ」を除く）は「ヲ」に前接し、「ニ」との承接においては前後接する。
- c. 極限形の副助詞は「ヲ」「ニ」に後接する。ただし、「デモ」に関しては「ヲ」との承接を避ける傾向にある。
- d. 評価系の副助詞は「ヲ」に前接する。「ニ」との承接においては、「クライ」のように原則として前接する場合もあれば、「ナド」「ナンゾ」「ナンカ」のように前接する傾向にあるという場合もある。

3.2 承接の実態から見る特徴

ここでは3.1で見られた特徴から、どのようなことがうかがえるのか、いくつか指摘してみたい。

b～dからは、副助詞のカテゴリーによって、それぞれ「ヲ」「ニ」との承接に特徴が見られること、またaからは、副助詞のカテゴリーを越えて、「ガ」の承接が決まっていることなどが明かであり、副助詞と格助詞の承接に関する研究においては、副助詞や格助詞を一括りにするような分析はできないということになる。これに関しては4節で改めて言及したい。

副助詞はカテゴリーを越えて常に「ガ」に前接すると決まっているため、「ガ」を除いて「ヲ」「ニ」との承接について考えてみる。副助詞の中には、「ヲ」「ニ」いずれにも前接する、いわば前接度が強い副助詞もあれば、「ヲ」の場合にだけ前接が見られる、前接度が弱い副助詞もある。格助詞「ヲ」「ニ」との承接において、前接する割合の高い順に副助詞を並べてみると、「クライ」(99.7%) > 「ナド」(99.3%) > 「ダケ」(90.1%) > 「ナンカ」(86.5%) 「ナンゾ」(85.4%) > 「バカリ」(78.9%) > 「ノミ」(70.5%) > 「コソ」(3.1%) > 「スラ」(0.9%) 「サエ」(0.7%) 「デモ」(0.05%) の順になる。この序列からうかがわれる特徴として2点あげられる。前接度が強いものは、「クライ(位)」「ナド(何ト)」「ダケ(丈)」「ナンカ(何カ)」「ナンゾ(何ゾ)」「バカリ(計り)」のように、その語源が名詞起源のものであるという点、また「ナド」や「バカリ」は古くからあるが、「クライ」「ダケ」「ナンカ」「ナンゾ」などは江戸期以降に生まれた新しい副助詞であるという点である。副助詞の

語源や発生期と格助詞に対する前接度との関連性については、さらに通時的な調査が必要となろう。今後の課題とし、いまは指摘だけにとどめる。

副助詞がカテゴリーを越えて常に「ガ」に前接するという点に関しても、やはり主語表示「ガ」の発生に関わる通時的な調査をまたなくてはならない。これも今後の課題となるところである。

『現代日本語文法5』によれば、「コン」が限定系の副助詞として分類されているが、格助詞との承接のあり方は「ノミ」「バカリ」「ダケ」と異なっており、またこれまでの研究によれば、とりたての仕方も「ノミ」「バカリ」「ダケ」とは異なるので、「コン」は限定系の副助詞から外するのが穏当であろう。

4. 先行研究と実態との整合性

現代語において格助詞との承接形式が副助詞の機能と相関するという研究がある。宮地（2007）では以下のように述べる。

従来「副助詞」とされて来たもの、つまり「格助詞との前後接が可能」な形式の中に、二種類ある、という点が浮かび上がる。その二種類とは、格助詞との前後接で機能を変えてくれるクライ・ホド・ナドのようなものと、この構文的特徴によっては機能を変えないダケ・ノミ・限定バカリと、である (p. 19)

以下の「クライ」は格助詞に前接することにより、〈名詞句とりたて〉として名詞「三時」のみを限定し、〈(おおよそ)程度〉の意味となり、格助詞に後接することにより、〈文とりたて〉として「三時におやつを食べる」という文レベルの要素をとりたてて〈対比・強調(最低限)〉の意味になるという。

三時くらいにおやつを食べよう (○おおよそ／×最低限)

[三時] のとりたて

三時にくらいおやつを食べよう (×おおよそ／○最低限)

[三時におやつを食べる] のとりたて

3.2で触れたように、副助詞と格助詞の承接に関する研究においては、副助詞や格助詞を一括りにする分析は危険であると思われる。ここではこの理論に関して実態をもとに検証してみたい。

4.1 「クライ」

まずは【表3】にあるとおり、そもそも「クライ」が「ガ」「ヲ」と承接する場合には、前接しかない。「ガ」は先に見たように、すべての副助詞に後接するという強固な性質が見られるので、これを除いたとしても、格助詞との前後接によって機能が変わるとする理論は「ヲ」に関しては成り立たなくなる。「ニ」と承接する際にはわずかではあるが、後接する場合が認められる。しかしそれにしても承接が認められる4例のうち1例は特殊なケースであり、結局「クライ」が「ニ」に後接する例は⑦～⑨の3例、「クライ」と「ニ」との承接全体の0.3%となる⁵⁾。この偏りの中で果たして格助詞との前後接によって副助詞の機能に違いが認められるという理論は成り立つのであろうか。

- ⑦ 「お客様、申し訳ありませんが、大盛りはできかねるのですが—」とだけ申し上げるようにいたします。まあ、これでたいがいのお客様は大盛りを注文するということをあきらめてくださるんですが…「なんで、できないんだ？いいだろ、大盛りにくらいしてくれたって。別にになにも難しい注文じゃないだろ？」—という感じでおっしゃるお客様がけっこう多いんですよ…（横田克治『ファミリーレストラン（裏）マニュアル』）
- ⑧ 花の命は短いんだから、恋せよ乙女！何もアイドルになるわけじゃないんだから、世のメジャーなところの男が好きな女になって、たくさんの人からモテなくなっちゃいい。でも自分の好きな男にくらい、やっぱり好かれないし、付き合ったらフラれたくないし、飽きられたくもない。努力すべきです。（横森理香『横森理香の恋愛指南』）
- ⑨ こんなに勉強をしても日本にきたらど田舎で生活するので勉強が役にたちません。無理をして卒業するか退学という道を選ぶか…アドバイスお願いします。——無理をして卒業する。アメリカの大学って卒業難しいから、田舎でも「卒業した！！」って言えば自慢にくらいになりますよ。

日本の学校でも退学は悪いイメージがありますよね。(Yahoo!知恵袋)

⑦は、いろいろな注文をする客が、その中でもせめて「大盛りにする」ことを望むということであれば、〈対比・強調(最低限)〉の意味が出てくるであろう。しかし「大盛りに」できないことに対して繰り返し「大盛りに」してほしいと言っており、〈程度〉としての「大盛りに」と解釈してもよさそうである。必ずしも〈対比・強調(最低限)〉になるとは限らないであろう。一方で⑧は、「たくさんの人」でなくても「好きな男に」好かれない、という対比文脈であるので、この場合には〈対比・強調(最低限)〉という解釈が可能であると思われる。⑨も同様に、「勉強が役に」立たなくても「卒業」は「自慢に」なる、という対比文脈であるので、〈対比・強調(最低限)〉という解釈が可能であろう。しかし、⑧⑨いずれも対比文脈となっており、「クライニ」という承接形式であっても「クライ」が〈対比・強調(最低限)〉になるのではないかというという疑問も生じる⁶⁾。

それでは「クライニ」はどのような文脈で用いられているのであろうか。BCCWJに見られる「クライ」はほとんどが数量詞に下接し、その場合には〈(おおよそ)程度〉の意味となっていると思われる。以下に、数量詞ではなく一般名詞に下接するものの中からいくつか「クライニ」となっている例をあげてみよう。

- ⑩ こうなると、頭はまったく働きません。そこで、タイマーをかけて二十分ほど昼寝をします。すると、鉛のようだった頭が、ダイヤモンドとは
いかにないにしろ、水晶くらいにはなります。

(さとう秀徳『画期的成果が上がった!』)

- ⑪ 下から上に照らし出す間接照明には、明暗のコントラストで、空間に広がりを持たせる効果がある。まあ、雑然とした部屋に間接照明を照らしてみたところで、効果のほどはあまり期待できないが、気休めくらいにはなるだろう。

(知的生活追跡班編『その道のプロが教える「裏ワザ」(金)読本』)

- ⑫ 「そうかな。いくら電話をしても出ようとしなないし…デートに誘っても、都合が悪いというし」「…」「なにか不満でもあるの、ほくに」「いいえ」「だったら…どうして?」「体調がちょっと悪かったものですから」「ほん

とうに?」「はい」「でも電話くらいには出られたんじゃないかな」「すみません」「なにがあったんだ?」いらだったように、松山がいった。

(小林久三『赤い法廷』)

- ⑬ るねは興奮してわんわんわんわんと吠えまくっていましたがこれも元気な証拠と思え、なんだか嬉しくなっちゃったワタシたち。まあ、友好的に寄って来てくれたお友達くらいには吠えないで欲しかったけど…

(Yahoo!ブログ)

- ⑭ 「せめて三味線でもひけたら」と妓は思っていた。三味線をひけたら場末の芸者くらいになれるかもしれないと思っているのだろう

(近藤富枝『今は幻吉原のものがたり』)

⑩～⑬の「クライニ」には対比の「ハ」が使われている例であり、さらに⑩は「ダイヤモンド」と「水晶」、⑪は「効果」と「気休め」、⑫は「デートの誘い」と「電話」のように、対比されるものが明示されている。いずれも〈対比・強調(最低限)〉という解釈となろう。⑭は対比されるものが明示されているわけではないので、「場末の芸者」〈程度〉という解釈になるのであろうが、〈最低限〉「場末の芸者になれる」という解釈も可能であると思われる。

⑧⑨「ニクライ」、⑩～⑫「クライニ」それぞれにおいて、対比される項目が明示されていることにより、「クライ」が〈対比・強調(最低限)〉として機能していると考えられた。つまり「クライ」の機能を決定しているのは「ニクライ」「クライニ」という承接形式ではないという可能性がある。「ニ」に後接する「クライ」が極端に少ないということを考え合わせれば、「クライ」が格助詞に前後接することによってその機能に違いが見られるという理論はすぐには認められないであろう。

4.2 「ナド」

宮地(2007)によれば、「ナド」は格助詞に前接すると「例示」、後接すると「強調」(p.15表2による)となるという。これに関してもBCCWJの実例によって検証してみたい。【表3】によれば、「ナド」の場合も「クライ」と同様、格助詞との承接は原則として前接すると考えられる。したがって、やはり格助詞との前後接によって機能が変わるのかどうか問題となるところで

ある。

まずは「ナド」が格助詞に後接する例から検証してみたい。【表3】によれば「ガナド」2例、「ヲナド」6例となっているが、これらには特殊な例が含まれており、これを除くと以下の「ヲナド」2例が確認されるのみである⁷⁾。

- ⑮ チンギス・ハーンは彼を近くに呼んでは学問のこと、天文のこと、まつりごとのことをなど、あれやこれと問うようになっていた
(木村毅『蒼きあまたの狼たちよ』)
- ⑯ Webメールだったら、メインページから、入っていく事多いですよ、そこで広告見てもらう事など、あとは会社によっては、アンケートをなど定期的に促すとも有るようですが
(Yahoo!知恵袋)

⑮は、「学問」「天文」「まつりごと」「あれやこれ」とあるとおり、「例示」の文脈と言えるであろう。⑯は、「広告を見てもらう」「アンケートを促す」とあり、これも「例示」であると考えられる。「ナド」が「ヲ」に後接しているものの「強調」という解釈にはならないであろう。

以下にはいくつか「ナド」が「ニ」に後接する例をあげる。

- ⑰ 五分の内に私は、その男性を午餐に、そして彼女を夕食になど、誘いました
(マーク・トウェイン(著)/金谷良夫(訳)『マーク・トウェインコレクション』)
- ⑱ 正月をはさんで、冬場は東京で暮らし、時折温泉になど出かけ、夏は涼しいロンドンで過ごし、時折ヨーロッパに遊びに行く、というのが、私の理想の生活なのだが、さて、実現するのはいつのことやら
(林信吾『英国ありのまま』)
- ⑲ 運用上は、ひと月ぐらいでは強制的に明け渡しを求めたりしないはずだ。そして、入居者の行方がわからない場合、実家になど連絡をとったりするものだ
(新野剛志『ザ・ベストミステリーズ』)
- ⑳ 柿畑の人たちが「明智の方はずらっとソヨゴ立てている」という明智は、最寄りの明智町のことで、このあたりの人たちのよく買物になど出向く町である。
(斎藤たま『行事とものけ』)

⑰は、「男性を午餐に」「彼女を夕食に」、⑱は、「東京で暮らし」「温泉に出かけ」「ロンドンで過ごし」という並列表現であり、「ナド」は「例示」として機能していると考えられる。⑲は、「連絡をとったりする」一例として「実家」があげられており、他にも「親戚」や「交友関係」が考えられるので、「ナド」はやはり「例示」として機能していると考えられる。また⑳は、「明智町」の説明で、人々が「よく買物に出向く」という「明智町」の性質の一つを示しているところで、他はさておき特に「買物に」行くというわけではない。この「ナド」も「例示」として機能していると考えられる。

以上、「ナド」が「ヲ」「ニ」に後接する例について、「ナド」が「強調」として機能しているかどうか確認した。「ナド」が「ニ」に後接する例の中にはもちろん「強調」として機能していると思われる例も存在する (⑳㉑)。

- ⑳ 宏美の興味は、可愛らしい三カ月の子犬に移っており、売れ残った不器量な犬になど見向きもしなかった。 (篠田節子『逃避行』)
- ㉑ 健太だって、保育園にいい友達は何人もできている。そんな所を捨てて、なぜ、見ず知らずの人たちと、縁もゆかりもない山奥になど行こうとするのか。 (能島龍三『風の地平』)

しかし、⑰～⑳で見たように、「ニナド」において「例示」として機能している「ナド」も少なからず見出せる。また「ヲ」に後接する「ナド」2例はいずれも「例示」として解釈される。したがって、「ナド」に関しても、格助詞との前後接によってとりたて機能が決まるという理論は成り立たないと考えられる。

4.3 検証結果

以上、格助詞との前後接によって明確に機能を変えるとされる「クライ」「ナド」について検証を試みた。BCCWJによれば、「ニ」との前後接に関わらず〈対比・強調(最低限)〉となる「クライ」や〈(おおよそ)程度〉となる「クライ」の存在が確認され、また同様に「ヲ」「ニ」に後接するにも関わらず「強調」ではなく「例示」となる「ナド」の存在が確認されることから、宮地(2007)の理論には従えないということになる。

沼田（1992）では、「クライ」が他の格助詞「へ」「カラ」「デ」「マデ」などに後接することが表で示されているが（p. 55表）、BCCWJではそのような例は見出せない⁸⁾。つまり「クライ」の機能と格助詞の前後接が問題になるのは格助詞全体の問題ではなく、「クライ」と「ニ」との間の個別の問題であるということになる。

ただし、「ナドニ」においては、「強調」の「ナド」を見出すことが困難であるため⁹⁾、「強調」の場合には「ナド」は格助詞に後接するという傾向があるということは言えるかもしれない。しかしここから敷衍して格助詞との前後接によって副助詞の機能が決まるという理論になるとは言えない。

5. まとめと今後の課題

3節では、副助詞と格助詞との承接に関する研究においては、副助詞や格助詞を一括りにしての分析はできないという結果となった。場合によってはかなり個別的な分析を要するであろう。4節では、宮地（2007）の理論に対する検証をおこなった。「クライ」や「ナド」は「格助詞との前後接で機能を明確に変える」という理論に関しても、「クライ」と「ナド」において、それぞれ「ヲ」や「ニ」との承接によって実態に違いが認められ、やはり個別的な分析を要すると考えられた。

現代語において、副助詞の機能と格助詞の前後接には相関が見られないということは4節で検証したが、古典語においては相関が認められるという先行研究がある。小柳（2003）では以下のように述べている。

たとえば、次の（1）の「ばかり」は「直衣」という語に後接して、この語だけに関係し、一方、（2）の「のみ」は「光を」という成分に後接して、「いよいよ光を添へたまふ」という節全体に関係すると考えられる。

（1）直衣（なほし）ばかりを取りて、（直衣だけを取って）

（源氏物語・紅葉賀・1、p. 341）

（2）いよいよ光をのみ添へたまふ御容貌（かたち）など、（ますます光をお加えになる一方のお姿など）

（源氏物語・行幸・3、p. 297）

格助詞と相互承接をする時、第1種の「ばかり」は（1）のように、

格助詞に前接し、第2種の「のみ」は(2)のように、格助詞に後接する。これは、第1種は語((1)は名詞)に、第2種は成分((2)は格成分)に関係するため、第1種は接尾語のように前接語に密着し、第2種は挿入的に節に入り込むとすることができる。(pp. 159~160)

上記の理論に関しては山田(2011)で検証を試みたことがあるが、副助詞「ノミ」の通時的研究から見た検証であり、今回のような副助詞と格助詞との承接を全体的に調査したものではなかった。「日本語歴史コーパス(CHJ)」を用いた、古典語における副助詞と格助詞との承接の実態調査を今後の課題としたい。

また今回の現代語に関する調査では、格助詞と承接する副助詞のみを対象としたが、格助詞が承接しない「名詞+副助詞」における「副助詞」の振る舞いについても調査する必要がある。さらに⑳㉑のように副詞との共起や「ハ」との共起という観点からの分析も必要であると思われる。

㉓ ああ、世界を見てみたい、せめて自分の生まれた町くらいは見てみたいという気持ちがつのってきたのですが

(ミゲル・デ・セルバンテス(著)/牛島信明(訳)『ドン・キホーテ』)

㉔ あれほど、「せめて自分の名前と住所ぐらいいは自分の手で書きたい」と願い、必死に習っていたオモニ達が、今、受付できちんと書き、嬉しそうに入って来るのを見た時の感激は忘れることはできません。

(金香都子『猪飼野路地裏通りゃんせ』)

注

- 1) 近藤(2000)「大量言語データを利用した研究法」pp. 54~62
- 2) 小柳(2008)は「とりたて詞と副助詞・係助詞の外延は一致しない」とし、とりたて詞とは、副助詞・係助詞の中から、とりたて機能で用いられている場合を集めて編成した語類であると述べる。
- 3) 「において」「について」「にとって」「によって」「に関して」「に対して」「を通して」等、いわゆる複合辞は除く。他にも一語化していると思われるものもあるが、考察結果に影響を与えるものではない。
- 4) 【表3】では「ガ」に後接する例「ガナド」が2例あることになっているが、実

際は「ガナドガ」と「ガ」が「ナド」の前後に2回使用されている例であり、これを除くと副助詞が「ガ」に後接する例は存在しないことになる。

- ① 話しことばの中で、時に音の省略や子音の歪みなどが聞かれる

(玉井直子『運動性構音障害』)

- ② 技能的な仕事としては、パソコンの組立・修理関係の仕事などがあるかもしれません…

(Yahoo!知恵袋)

- 5) 以下の例は、名詞には下接するものの、述部と対応する補足語になっていないので除く。

食事の前のちょっとしたおつまみにくらいなら、食ってやってもいいけども

(栗本薫『ヤーンの朝』)

- 6) 因みに、学生にアンケートしてみると、⑦～⑨の文脈において「クライニ」「ニクライ」どちらでも意味は変わらないという結果を得ている。実際の運用においては使い分けの意識はないようである。

- 7) 「ガナド」に関しては注4で触れたとおりである。また「ヲナド」6例中4例は以下に示すような「ヲナドヲ」となっている。

- ① 千九百六十八年アメリカに生まれ、イギー・ポップやファットボーイ・スリムらの（ミュージック）ビデオをなどを手がけた後、アート界へ進出。

(実著者不明/白坂ゆり『Weeklyぴあ』)

- ② 総合的な環境認識のほか自然の豊かさや多様性をなどを学んでおり

(西源次郎『博物館学講座』)

- 8) 日本語歴史コーパス(CHJ)の明治大正期においても格助詞「へ」「カラ」「デ」「マデ」に後接する「クライ」は見られないが、青空文庫(『青空文庫』パッケージ(国立国語研究所))では格助詞「へ」「デ」「マデ」に後接する「クライ」が見られる。

- ① 「ううむ……また痛みはじめてきた。お十夜のやつに斬やられた傷が……お吉、ほかの医者にみせてくれ、この傷が……この傷さえどうにかなれば、立てねえという筈はねえ。阿波へくらい、行けねえということはない」

(吉川英治『鳴門秘帖』)

- ② 狂馬楽はこれを師走の珍芸会の高座でくらいは演ったかもしれないが、まずまず平常は高座以外の、仲間との行住坐臥、もしくは冠婚葬祭の時にのみ、もっぱら力演これ務めたのである。(正岡容『寄席行燈』)
- ③ 難問である。一口にそれに答える事はむずかしい。それに答えるにはギンザを四丁目からシンバシまでくらい歩かなければならない。(兼常清佐『流行唄』)
- ④ その時は自分も愉快だったが、しばらくすると、例の梯子の下へ出た。水は胸までくらい我慢するがこの梯子には、——せめて帰り路だけでも好いから、遁れたかったが、やっぱりちょうどその下へ出て来た。(夏目漱石『坑夫』)
- ⑤ 長蔵さんがいたら、何とか尽力して坑夫にしてくれるだろう。よし坑夫にしてくれないまでも、どうにか片をつけてくれるだろう。汽車賃を出してくれたくらいだから、方角のわかる所までくらいは送り出してくれそうなのだ。藁口を長蔵さんに取られてから、懐中には一文もない。帰るにしても、帰る途中で腹が減って山の中で行倒れになるまでだ。(夏目漱石『坑夫』)
- ⑥ 長次郎谷の下りはクラストの雪で面白くなかった。それなのに劔沢は相変わらず粉雪状態だった。思うに風当りのよい谷は一日くらいの快晴ではまだ大丈夫らしい。劔沢の登りは長かった。長次郎谷の下までくらいコッヘルを持ってきておけばよかったろうと思った。(加藤文太郎『単独行』)

①は「立てねえという筈はねえ」、少なくとも「阿波へ行けねえということはない」、⑤は「よし坑夫にしてくれないまでも、どうにか片をつけてくれるだろう」、少なくとも「方角のわかる所までは送り出してくれそう」という文脈で、「クライ」を〈対比・強調(最低限)〉と見ることはできる。しかし、②③④⑥の「クライ」はいずれも〈程度〉となっていると思われる。

- 9) 詳細は精査しなくてはならないが、「ナドニ」において「強調」と思われる「ナド」をあげておく。

- ① 「ねえ、玉穂。おまえが姫の守り刀になってくれないかしら?」「それは、…無理です——(中略)——妍子どのがお守りになればいいのです」「わたくしが?」「はい。強情で頑固で気が強い。わたしなどに頭を下げるの必要はありません。妍子どのが元気に道長どのと渡り合えば、きっと姫宮は健やかに育たれるはずです」玉穂の言葉に、妍子がぐすりと笑った。「まったく褒め言葉になっていないわ」(毛利志生子『外法師冥路の月』)

- ② たしかに、森永氏は「B」で生きるサラリーマンは「C」に転落しないよう最大限の注意を怠るべきではないと主張してきた。「C＝年収百万円クラス」に転落してしまったら、「自分の好きなこと」をして生きていく経済的基礎が崩壊してしまい、それこそワクワドキドキどころの話ではなくなる——（中略）——「C」に転落せずに「B」で生きるというコンセプトは、会社にしがみつき、会社の呪縛から逃れられないサラリーマンに対する新しい価値観の提示なのである。一方、「ビンボー人」をすばらしいとするコンセプトは、もともとそんな呪縛などに支配されていない非サラリーマンに対する賛辞なのである。

（森省歩『ボーイズ「B」アンビシャス！』）

【参考文献】

- 小柳智一（2003）「限定のとりたての歴史的変化——中古以前——」『日本語のとりたて——現代語と歴史的変化・地理的変異』（くろしお出版）
- 小柳智一（2008）「副助詞研究の可能性」『日本語文法』8-2
- 近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』（ひつじ書房）
- 沼田善子（1992）『日本語文法セルフ・マスターシリーズ5 「も」「だけ」「さえ」など——とりたて——』（くろしお出版）
- 沼田善子（2008）「とりたて詞の分布と意味をめぐって——「も」と「だけ」の記述を例に——」『日本語文法』8-2
- 宮地朝子（2007）『日本語助詞シカに関わる構文構造史的研究』（ひつじ書房）
- 山田昌裕（2011）「副助詞「ノミ」の変容と副助詞研究の課題」『恵泉女学園大学紀要』